

昭和三十五年九月号

四百八十五號

大正十三年九月号

八月二十一日 金拾圓也 小學校備品費へ 矢堀徳美子殿
 金拾圓也 保護者會基本金へ 永井恭子殿
 金拾圓也 今 田崎文平殿

九月一日 始業式
 九月二日 級長選挙
 九月七日 放課後舞五以上男神社清掃
 九月八日 金拾圓也 保護者會基本金へ 高田潤殿
 高田愛子殿

九月九日 金拾圓也 小學校備品費へ 平野昌代殿
 九月十日 午後一時保護者會總會
 九月十一日 午後一時より舞五以上男神社清掃
 九月十二日 五十嵐先生赴任
 九月十九日 金五圓也 小學校備品費へ 矢堀宏殿

じん二 つバリ方

□ なつやすみに 奥山幸男
 ぼくはなつやすみに朝おきてからべん
 きやうをしてべんきやうがすんでから
 銀すまであそびました。えれにあき
 と今度はお金をつたりかになつた
 リ。それからか金をつたりしてあそ
 びました。およびますと、まよ年より
 も下しとおよびるやうになりました。
 はじめはあつと二つでおよびました。
 だん／＼深いと二つでおよびました。
 しまひには、まよ水でもおよびるやうに
 なりました。それをもあきんに話
 すと、あかあきんは、まようが、めがね
 をかけて、下すいました。

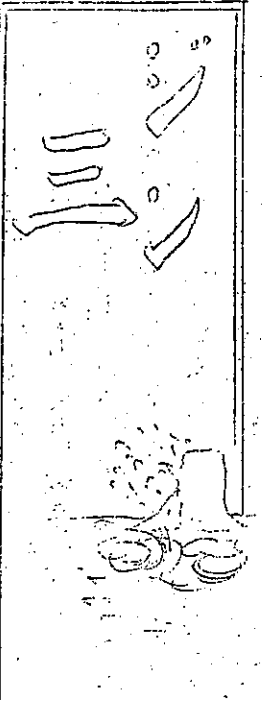
ずしくて、いきもちです。
 みんなごほんのすんだあとで花火を
 やるから、おもしろいです。
 私はあみやげにいたいた花火を
 もつては、おはへいきました。はとほに
 は、なり田丸のあかりをつけて、なま
 た、せんきを、つげると、中、み、た、い、な、も
 のが、たん、さん、と、ん、で、くる、な、で、中、が、す
 こし、しか、い、ない、と、二、ろ、で、花、火、を、し
 ました。あ、ん、ま、り、ま、れ、い、だ、つ、た、の、で
 あ、し、ま、ひ、に、パン、ザ、イ、を、し、ま、し、た。
 山の上の星があるのを見て、あたう三
 れん、ば、つ、が、ど、二、か、で
 ドン、ドン、ドン、
 となりました。
 おそくなるのつかへりました。

□ 七夕の夜 奥中和代 諸田正子
 なつやすみは、おつつけれども、夜はすに行つて、べんきやうをし、たり、かち

まるの木にのぼつて、しやうりやうりしたリすましました。やすんだに二角に家があ
 してありき多とみだりけいほりに、むもをとりましたので、きいて見ましたら、「学校」
 けて、えん公をしばって、川にたよげるとおれへて下さしました。小まの門子校で
 たぼがいんぐもつれろくで、バケツの中に入れた行きました。たごさんメロンのな
 に入れておきました。かあちゃんか
 へ行かうとするど、かあちゃんか
 「かほいさかたのうは、まじで、また
 あしたきまつたぼいじ」
 とおつしやいました。
 私川にのぼしてやると、みんち
 らぼつになつて、うれいさうにぼけて
 行きました。

□おとうとじま あさままへ子
 私たらはかづ子ちゃんたらと大せいでおとう
 とじまにあまびに行きました。そうして山
 に上りました。山のつるも、さかすかした
 いかさたべました。と、まじで、か
 をれからメロンを見、高い山へ行
 した。とうくで、と、まじで、みんち

□じゃぼん王
 ぼくのしやぼん王
 犬きくなつて
 ど二へ行く。
 ぞんしんぼしうで、ぶつって
 なくなつた。
 つぎ／＼くられた。大きいの。
 ど二まで行つて、きえるんだ。
 向ふのタマナにぶつかつて
 パット、きえ、なくなつた。



朝のうみと、親のいひつけ

岩井 功

僕はけい早く起きて海岸へ行つて見ると、黒い
 の方に大きな波がどぶんとあたる。まるで
 花火のやうに高くあがつて落ちる。これを見
 てみると、おとうさんが、おみをするのたか
 らおいげとおつしやつた。僕は少し、いやだ
 とおもつたが、おとうさんのいひつけだから
 しようとおもつて行つてくると、僕がいふと
 おとうさんが、「かへつて来てからい、物を
 あげるといひました。僕は、いそいでいつて
 おみですて、おみ来た。おあおいでとおとう
 さんがいつたから、おみをあげるおかとおも
 ったら、おみをもらへたおみでした。

僕は何かしごとをしてから、ぼんをいたくと
 おいしいおといひながら、はういつほいいた
 いいて、かう學校へ行つた。

◎おにい様の鬼出 村松 こと

私はおばあちゃんに、おんちやんは、いきでる
 きへますと、おばあちゃんはお前とまざるは
 りんちやんのことを、おんちやんは、おんちやん
 ばあちゃんの手紙が、おんちやんは、おんちやん
 おくつて、おんちやんは、おんちやんは、おんちやん
 うたでもうたつてゐると、かほの前には、おんちや
 んのすがたが、うつつてきます。まじで、おんちや
 じうしやしんが、でて来たおんちやんは、おんちやん
 かい、おんちやんは、おんちやんは、おんちやん
 であるが、りんちやんは、おんちやんは、おんちやん
 つかむとしかられるのを、おんちやんは、おんちやん
 ん、おんちやんは、おんちやんは、おんちやんは、おんちやん
 き、おんちやんは、おんちやんは、おんちやんは、おんちやん
 せつちやんが、おんちやんは、おんちやんは、おんちやんは、おんちやん
 びおんちやんは、おんちやんは、おんちやんは、おんちやんは、おんちやん

たまつてきました。私は、ハンケチでふいて
さりぬぎをすきとまたりんちやんのことを思
ひだした。それからは、はがきがきた。私は
うれしかった。

①なつやすみにたのしかったこと

いよく夏休みをはりました。だれでも夏休
にいくわいぐらいはおもしろかったことが
あるでせう。あるひはこわかったことや、こ
かつたことや、いよくなことがあつたでせう。
私も一ばんおもしろかつたといふんじやない
がこの間おあさんたちと火せいいでみかづき
山に行きました。とちゅうまでくると家があら
りました。どこの家だと思つてだんぐちかよ
つて見たらそれは四半生の私子さんの家だ
た。私子さんのおかあさんは島のそばでせん
たくをしてゐました。さうして水をもちつて
少し休ませてもちました。少し行くともつ
白なにはとりがたくさんあました。牛も
した。いよくみかづき山につくと、坂がど

尋 四 の 綴 方

①遠足

中 宏

待ちに待つたたのしい遠足の日だ
お母さんにいろいろしたくをしていただいで七
時に家を出た。七時半に學校を出發して清瀬奥村
を通つて第一トンネルに入った。思つたより短い
トンネルだつた。次に第二トンネルつづいて第三
第四トンネルをくぐり吹上谷に出て、縣村へつ
いた。こゝで十五分やすんで又歩き出した。それから
しばらく歩いて七曲へついた。こゝは全く字の通
り、幾度も曲り幾度も急な坂をかけた下りた。この頃
からみんなそろそろつかれてきた。やがて平な道
つづいていぬはよく汁のり重さうにいなほがさが
つてゐるもう所々黄金色に汁のり風がふく度
美しくさわやかなたてゝゐる。この頃からあせ道
の小川にはお玉じやくしやくしやくのむねが泳
いでゐるのが目につくもう皆んなつかれたのも

んと多にぶつかつてまづ白くちつてとでもきれ
いでした。つくとまづ山の方を見ずからおへ
んとうをたべました。おへんとうをたべてお
とくもつて来たのでおあさんか早くたべて
かへらうといつたのでいそいでおへんとうを
たべてかへりました。かへり道に小ぢなすい
がおちてゐたので私はおつてかへらうといつて
拾つてかへりました。みかづき山に行つたこと
が一ばん楽しかつた。

②おとうと島へ行つたこと 平本 平敏

この間僕はおとうさんとおとうと島へいぢ
いきました。そしてくじやくやくいぢなりを
みました。あとでめろ人をたくさんたべました。
そしておとうさんとちがめらんののはこを
でからおちさんについた。いぢもとの海岸であ
そんで居るとおちさんにかんじやくをもちつてい
ち丸にのりました。舟がはしりながらおべんたう
をたべました。おとうさんたちはひきはを
あいつぱりをたくさんつりました。はとはたつ
いてかんじやくとめろ人もつてうぢへかへりま
すとおとうと島へかへりました。

志れておそ二にお玉じやくしだ。こゝにどじや
うが泳いでゐると大さわざだ。これから又稲田
のほろ道をすんく歩いて間もなく小港海岸
についた。こゝは白い砂浜が廣びろして泳ぎに
もよい所だ。青々とした海の入江の向はか
を船らしいのが二三そつ見えるのも一つ
画のやうだ。こゝでいよくおべんたうだ。お復
が大分すいたのでそのおいしかつたこと、お水
すれらぬないやがておべんたうがすんで海へ
入つておそんだら砂ちをびをしたら皆思ひ思
かにたのしくおそんだ僕もこゝな所やたのし
くおそんだ。こゝはいつまでも夏のたのしい思
出としてわすれられぬ。

③かわつた役場のおあさん 金川 愛子

私がけや學校にくるとかわつたおあさんが先
生方にお茶をいれて居ました。私は前のあつ
がはげたおあさんはどうもたんざらうかほつ
たおあさんだとおだのこはいへないがどき
へて居るとかわがかんくくくとなつて
ゐたので、なるとこをけるじやたつたかない

かおもてでたいて居た。私はよつほどおしへて
やりたかつたがもうあつまなげればならぬし
おくれ、ばいけなしいおしえなりではしつてい
つた。あとおちやんのかほをみて笑つた。

② 雨の降る夜 奥山涼子

かほんをしまつておもてへ出た
外は雨が降りらしい。つもにぎやかな五つきは
ばも今日はひつそりとしずまりかへつてゐる。
ふと地ね心に目をやつた時私は思はずにおき水
いばことみんなきてごらんと言つた。
それこそそのはづ両ちがりの地面にはたぐさん水
たまりがでてゐる。さうしてみん家の家のでん
まが地面をたらしめてゐる。地面は電氣の光をうけ
てまぶしく輝いてゐる。私は地面にけしとれ、あつて
べんきやうをしいくことゑわすれてゐた。
そのとき家の中からまだいかなかつたのか山と
いふに急がしたのひりそりゑ強しにいつた。
いまでもその時のことを思ひともう一どあつた
しきが思ひたいと思ひました。

③ 卯 奥山涼子
あつたといふ音と共に目がさめた。
いそいでだいいころの方へいって走つてふと向
ふの方を思ふ。すると山の方ばかりかすんでゐた。
そのまはりの木も雨にぬれて青々としてゐる。
風が吹くたがゆら／＼ゆれてゐる。家のま
は雨がふるりであまどがしりてあつてゐる。
りとしてゐる。私はまだかほをあらはさないので
みずぎくんでせつせんかほをあらはした。
いそぎもあつた。おれからあつた。いそぎもあつた。
べたごほんをたべるときもいそぎもあつた。いそぎもあつた。
てきもちがよい。



尋五綴方 夏休の思出

④ 糸を切つたちぢ

菊池勝夫

間もほく刀又―は下された。二見岩のあた
りでいかりを下した。箱目が物でのぞいて見る
としまだひやえさつとりかたくさんぬた。すぐ
糸をたらしとやかく「く」としめた。しめるか
早いかあけてみるとしまだひやか、つておた
又一匹々々と面白いやうに魚が釣れる。箱のわ
ねで見下せば今度はちぢやもろこがある。あれ
か食つたら「な」と思つてためしに細い糸に
えさつとりをつけてたらしした。今にもちぢが食
ひさうだ。「く」と食つた。しかしあんばい大き
いのにか、られてはたまりのない。ほこを音
かしたと思ふと糸は切れておた。そこでちぢ

んにえさをつけてたらしした。すると一せいに
食つては逃げ、食つては逃げして中々かいらな
い。ちぢが食つたと思ふとまた逃げる。く
としめた。もろこだ。しめるく。上げて見
ると長々四十種もある大きさをたつた。だがあ
の糸を切つたちぢがもつとく。大きく思はれ
それか釣れぬのが残念だつた。

⑤ 夏休の當番

十五 堅 脩

僕等は夏休に學校の庭を掃除に來ました。
僕は第二組でした。さうして三日おきに朝早
く行つて掃除をしなけければならぬのです。
僕は當番の時朝は四時半頃起きて行きました。
學校について僕等のさうする所を見るとも
う四五人きておました。さうして半分ぐら
いしてありました。僕もほうきを持つてはま
めました。はいてしまつた頃とわんからを
ついでごみを捨てに行くのです。けれどわん
んく。と日かたつにつれて當番にくる人が

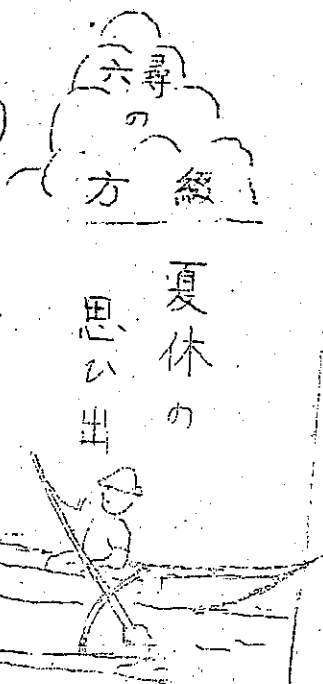
早くはつたのでしまひには當番には来たけれど、してあつておくれた時もありました。けれど其の外は一日もやまずみません。たつた一日だけおくれたので残念に思ひました。

● 母島へ行ったこと

大関 益

八月十四日午後十一時半に芝園丸にのりこま
ました。船の中に入つて見ますと皆疊の上にな
りく／＼おこるんでおます。何だか船の中はむ
し暑くことと私には居られないううな気がし
ました。しばらくたつて父に「行つて参りま
す。」と言ひました。父は歸つたので急にさびし
くなりました。其の中におゐるこしまひました。
それでもすぐ目がさめてアタねわられませぬ。
午前二時になつて芝園丸は父島の港を出帆しま
した。其の中にだん／＼氣持がわるくなつてあ
ける人が次第に多くなつてきました。やつとい
やな一夜が明けるとあくる朝になりました。木
と氣笛がはつたのでねえおた人までが飛起きて

かほを洗ひに行きました。しばらくたつて芝
園丸から小ボートに移りました。十分程たつ
て沖村の波止場に着きました。叔父さんが迎
ひに来てくれたので後をついて家へ行く途中
人々が顔をみたく／＼するのどすく／＼母島がいや
になりました。叔父さんの家へ着いてから顔を
洗つて御飯をいただきます。たつちやんが
勉強してかッ見物に連れて行つていただきます
ました。母島には大それたの家は父島かほつてお
つて楽しくあそびました。天理教の家は見ま
した。そこにはきれいな川が流れておて皆を
こでせんたくをするのです。せんたく板は石
しなで石山から石をとつて来てせんたく石
のやうに作つてそれを洗ひ具合のよい所へ下
えてあります。しようび園にも行つて見まし
た。しようび園にはまだ學校にあがつさぬ
い子で一人で便所へ行ける子かあがる學校が
す。(あと二枚ついですが書ききれませぬ。
残念ながらうこれまでにしておきます)



夏休も半ば過ぎた或日のこと。
海岸へ出ると太陽はやけつくやう
に照りつけておる。だが海を渡
る風は好い。僕等は一息に
海へ押出した。黒岩を過ぎるとひゆうと強い風
帆に其の風を一ぱいに受けて走り出した。早い
早い。時々うけがぐいと上る。恐しいやら面白
いやら何とも言へない心地である。えぼしの陰
にまはると風が止んだのでいかりを下してめい
めいに釣り始めた。僕も竿に餌をつけたまゝか
いとかがいの間において天びんでつり始めた。箱
眼鏡のぞくと生れてかり始めて見る様な大き
なばら／＼がゆ／＼と泳いで居た。そんな事

つて来
に砂
カノートを

に氣を取られてゐる内に、手に持つてゐる綱が
ぐ／＼と引かれた。占めたとばかり急いで上
げて見ると大きなが／＼もんであつた。又下す
と今度はからす綱がくつて針を切られた。針
を附代へやうとすると竿ががいの間からする
すると抜けて海の中に落ちてしまつた。急い
で拾はうとすると持つて居た釣針を二本海へ
落した。竿はやうやく拾ひ上げると大きな綱
綱がくつてゐた。かうしてめい／＼(三三三三三
の獲物をまつて日の沈む頃意氣揚々と引上げた

富田金造

八月の或日お父さんに連れられて弟島へ行く
ことになりました。港を出たら大きな岩の間
を通りぬけました。水はよく澄んで底まで見
えます。兄島のせとをぬける頃扇浦の人が引
なはをしました。けれどそれは一匹もか、
りませんでした。色々の島の間をぬけて弟島
に近づいて来ました。すると今までくはなかつ
た引なはにあいつばらがかりました。干す

とはくひ下すとはくひ面白いやうにづれます。
それを見てゐる内に舟はいつの間にか弟島に着
きました。あたりはたこの木が一面に生えてゐる
朝風にゆら／＼と動いておます。約二十といふ所
だろうです。これから一歩も坂道を登るのだと
言はれてびつくりしました。けれど弟島の子供
は平気で歩いてゐるのだと云はれて僕もがまん
しなければなりませんと思ひました。あへて
上り切るとあたりは一面の島でした。おもしろ
うなメロンが一ぱいなつておりました。僕はそれ
を腹いっぱいたべておみやげにまでもらつてか
へりました。夏休みの中でこれが一番うれしか
つた事です。

淡沼和子

或日とても暑かつたので午後から防風林へ母
ちやんも清ちやんもさそつて出かけた。海岸に
上げてあるカヌーに腰を下して沖の方をみると
黒岩の附近に釣舟が二三まうゐた。今朝東京か
ら歸つて来たお兄ちやん達がカヌーに乗つて行

つた筈だかと思つてよく見ると五人乗の中が
ヌーを見つけた。きつとそれがやうだと思つ
て「お兄ちやん」と叫んだ。禮子達も清ちやんも
「マ、ちやん、マ、ちやん」と叫んだら向ふで釣
舟がうしろを向くやうなうしろを向くやうな
舟を返せ。良子が乗るんだから」と云つたけ
れどなが／＼返さない。やうやくの事ではな
きを海岸へ向けた。山岸につくと私も良子も清
ちやんも皆乗つて沖へ漕いだ。下を見るところ
珊瑚やうらがごもまでも續いてその間を小さな
珊瑚やうらも知らない魚がうら／＼と泳いで行
く。その落着が沈みけしなにかと心配してゐ
る私にはしやくにさはる。もう母ちやん等が
小さく見える。山岸から二百米位だらうと私は
思つた。箱めがねが廻つて来たので下を見た。
こんなきれいな海を見たのは始めてだ。天然自
然の水族館である。大きな岩の穴には針子本
がまはつてゐる。そばにはさんごのやうが林
のやうに立ち並んでゐる。私は東京の静子さ
んにこんな所を見せたらどうなるにか喜ぶ事だ
らうと思つた。(以下略)

母のことば

江平 靜男

五月十三日の横浜丸で、北支へ行つてゐる兄から
手紙がきました。僕は學校がひけたら一目さん
に家へかへつて、兄の手紙をよまふと「母さん、
お前はぜいたくな物をあつらへたよ。兵隊さん
が戦地で、暑いのもかまはず戦することを考へな
がら手紙をば四十才の人が兄たちと一しよになつ
て戦軍してゐるといふよ。それから物を大切にト
ておくれ今は國民精神總動員をやつてゐるんだよ
と云はれた。僕はその時ハツト心の中心の底か
らあつた涙が出た。僕は母の言葉に感動されて
座りまゝ隅で泣いた。おハ、

夏休みの出来事 井上 弘

五月三日の庭當番である。いつもより早く起き
たけれどはならないから早く床についた。いつの
間にか目がさめたから起きて見ると、まだ星が明
るく光つてゐる。又一和入りした。今度は四時半

に目がさめた。スグ起きて床をかたづけで、学
校へきて庭當番をした。青年學校の生徒が元氣
よく訓練してゐた。夏休みも今年はこうきんち
ようしてゐるかと思つた。 終り

雞の最後 中道 秀男

ハサ／＼といふ音が家の前で起つた。と思ふ
と土がはね上つた。何んだらうと思つて二飯
を食べるのを止めて見ると、にはとりが苦し
うに、もがいてゐた。すると間もなくグタリと
なつて死んでしまつた。ちどろいて母に話す
とズグが視に行つて誰かしたので小視から若い
人がきて、にはとりを持って行つた。私は生物
にはどうして死といふものがあるかどつくつ
く考へた。にはとりの苦しさうに土をはねあ
げた。その土もがあれうよと、いかに竹の
葉にぶつかつて音をたてたやうすが、いまも
まだ頭にえがかれる。 〃

神めたすけに、わが身よくなる。

○母

壬生 恒子

鳥なく青葉一の山を見ては私は常に母に母といふことを思ふ。私達に一番光をあてて下さるものは母であると思ひます。私達を育てて下さることに、ほとんどの人々も我慢して常に私達の身の上を心配して下さる。私の家は昨年から店屋を出して以前のやうにの人氣に、はあられなくなつた。けれども初めのうちは一生懸命にお店の手傳をしてたけれど、近頃はあきまきで一人興に引きこもることを始めてみますが、こんな時でも母は一人ぼり、働いて下さる私を見てありがたいと思ひます。アの親よりもヨコをかはう心は私たちも母が心とかはりはないと思ひます。私にこれを見れば、私達はすなほに父母の言ひごとをきかなければならぬと思ひます。

○トンプの運命

佐々木オミス

ある日のことであつた。私が石坂の前のおぼさんの家へお使に行つた時、おぼさんがおぼさんの家の前にトンプが死んでゐたので、道ばたに置いて行つた。又かへりにトンプを、らべて見ると、羽

をぢぢられ尾も半分もぢぢられてゐた。とてもかありさうな死にかたであつた。私は「何て運の悪いトンプだろ」と体たれがこんなおどいことをするんだらう、トンプはまつとその人をうらんでゐるだらう。私もトンプをとほして遊ぶのがすきであつたが、トンプは害虫で在り人の大事な血を吸ふ故を取らぬ益虫である。それをこんなにもいことをするのはいかぬ。私達はトンプを大に、してやりませう。

オハリ

⑤ ⑤ ⑤
⑩ ⑩ ⑩
⑤ ⑤ ⑤

高二級方

硬筆

小宮山キヨ子

よく私達の中で筆記帳の字を粗雑に書いて先生から注意を受ける者が多くある。其の注意といふのは人の精神は字にあるものがある。字をしっかりと書く者はそのやうに其の者の精神もしっかりとあるし、又字を粗雑に書く者はそのやうにその者の精神もかきま

或る日暮

笹本良子

それは硬筆書方練習草紙のみでなく毎日習字科に於ける筆記の際にもである。

まつておなれ先生が云はれた。世の中には誰か見ても申し分ないといふやうに字を丁寧にしてつかり美しく書く者もあつた。又いふ先生方から注意を受けても字を粗雑に書くといふやうな者もある。私もワラスの中からは随分字は下手な方である。それで時々先生から注意を受けることがある。これから先はそういふやうな注意を戴かないやうに一生懸命に硬筆の練習をやらう。

鳥の一すみから吹いて来る。その風はさそはれて、とんぼと上から上へ上へ行つた。空には一点の雲もなく、まきまつを青空のま、とんぼはすうすうと身軽げに、せんま、ま、ま、ま、と晴れた空を飛んでゐる。いよ、仕事にとりかゝつた。くさりかけてある草花を草の中からひきぬいては、ほんくとを、つて、今度、竹を、思つて、か、入れ、ひ、と、私、身長、上、五、六、寸、と、上、つ、た。それは、マ、グ、サ、の、葉、が、か、さ、か、さ、と、な、つ、て、何、が、私、に、さ、ん、や、い、て、お、る、よ、う、に、あ、る。マ、グ、サ、の、ほ、ろ、も、さ、ん、ま、か、わ、り、に、つ、か、づ、て、く、れ、とい、ふ、か、で、あ、る、か、ど、う、か、と、い、ふ、こ、と、を、い、つ、て、お、る、ま、に、時、間、は、六、時、に、な、つ、て、あ、る。もう旭山のふもとには、い、つ、か、り、日、が、あ、つ、て、ま

其處此處のカヌーが二見港目ざして歸つて
 くる。どこかでは盛に犬の遠吠へかしてゐる。
 ちからはつてゐる子供が佳木つて「ゴマケコヤケデ
 ヒカケト」云々と歌ふ元氣な聲が心のふもとに
 ニぞましてゐる。
 そのうち日はとつぱりとしつんだ。マゲサの葉
 は相變らずしきりにかさくんとすれ合つて
 ぬるぬる一層きいて見たら草のさやさを

昭和十二年度大村高等小學校児童保護者會經費決算

支				入 收				收 支 項	備 考						
展覽會費補助	運動會費補助	發行費補助	庶務費	貸與品用品費	配給學用品費	計	雜收入	倉 庫	全現金繰越	前年度配給 現品繰越	要 項	豫算額	決算額	増減(印)	
五〇〇〇〇	八〇〇〇〇	五〇〇〇〇	一〇〇〇〇	二〇〇〇〇	一九八〇〇	二五六七九二〇	一〇〇〇〇〇	一八九八六〇〇	八二六五〇	四八六六七〇	豫算額	四八六六七〇	四八六六七〇		
					二五九二九八〇	三四八四〇一〇	一二七五九〇	一七七八一〇〇	八三六五〇		決算額	四八六六七〇	四八六六七〇		
			△ 六〇〇〇	△ 二〇〇〇	△ 三三八七〇	△ 八三九一〇	二七五九〇	△ 一一一五〇			増減(印)				
											備 考				

未納二六三〇 五三〇七〇 支
 其他八歳出口 教減二〇〇
 基本金利子三三三九〇 五三三〇月
 寄附六六四〇 前年度未納分二七八〇

外=配給現金残	差引現金残	出				
		計	雜費	衛生費	學費會費補助	基本金造成費
(見積)		二五七九二〇	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇
		二六九五七〇	四五〇〇〇	二〇〇〇〇	五〇〇〇〇	二七七五九〇
		△三九八三五〇	△	△	△	七七五九〇
		三二四四四〇	五〇〇〇〇	三〇〇〇〇		△
		四三二四一〇	二七九二〇			係職員手当三名分

財 産

計	基 本 金	債與學用品	什 器	備 考
				戸棚大ニケ五〇円中八ヶ八〇円小八ヶ四〇円 算盤箱八ヶ二四円其ノ他一〇円 計教器六〇ヶ六円算盤二八〇ヶ八四円 三角定規等三〇組六〇円
				郵便貯金(但シ内金三〇〇円立大神山神社へ貸付)

昭和十三年度大村尋常小學校児童保護者會經費豫算

支		入 收		備 考
支 項	金額	入 項	金額	
配給學用品費	二〇〇〇〇	前年度豫算額	四三三四一〇	
債與學用品費	九〇〇〇	配給現金繰越	四八六六七〇	
庶務費	一〇〇〇	△現金繰越	八二六五〇	
發行費補助	五〇〇〇	會 費	一八九八六〇	
運動會費補助	八〇〇〇	雜 收	一七〇〇〇	
展覽會費補助	五〇〇〇	計	二八八八〇	
			二五六七九二〇	
			一九八八〇	
			二〇〇〇〇	
			七〇〇〇〇	
			二〇〇〇〇	
			三二〇一三〇	
			七二六〇〇	
			八九六〇	廿月分
			寄附五〇円未納二〇円	

出		學藝會費補助	衛生費	基本金造成費	雜費	豫備費	計
		五〇〇〇	五〇〇〇	二八〇〇〇	二〇〇〇〇	二八〇〇〇	二八八八〇
		五〇〇〇	五〇〇〇	二〇〇〇〇	五〇〇〇〇	二七九二〇	二五六七二〇
				八〇〇〇〇	一五〇〇〇〇	一一〇	三三〇一三〇
				基本金利子一〇〇円 會費ヨリ一〇〇円其他八〇円	係職員手當其他		

備考

- 一次年度ニ約五百円程度ノ現品(配給)ヲ繰越ス予定アリ
- 昭和十三年四月末児童數四二二名昨年ヨリ七名増
- 標準口數ヲ繰出スル児童數三三九名〃〃四名増
- 標準口數ヲ繰出セザル児童數四八名〃〃一名増
- 標準口數以上ヲ繰出スル児童數二六名〃〃二名減
- 寄附口數 一一〇
- 免除 一名

計八九六〇

國民精神統動員銃後後援強化週間行事

月五日

祈願並感謝ノ日

十月八日

隣保相扶ノ日

國威宣揚、出征軍人
武運長久祈願
傷痍軍人平癒祈願
傷痍軍人出征軍人感謝

十月九日

善行ヲ讚ムノ日
美德、賞揚並表彰

月六日

慰靈ノ日

戰没軍人ノ墓參

十月十日

堅忍持久ノ日

十月七日

慰問ノ日

出征軍人慰問(慰問狀
並慰問袋ヲ贈ル)
傷病軍人慰問
留守家族慰問

勤儉力行
生活刷新

(享樂ノ節制一粟主
義ヲ厲入行シ餘剩ヲ
貯蓄)

十月十一日 國民強化ノ日

ウツハツク

戦役軍人及傷夷軍人ニ
對スル尊敬感謝ノ念心ノ
身擧
戦役軍人遺族ノ名譽ニ對ス
ル認識徹底

明治天皇御製(明治三十一年)

國をおもふ心に一つあかりけり
いくさのにはに立つもたをぬも

昭和十三年九月號までしと第百八十五號